

事業名： KITAMIオンライン展示の取り組み




作成者：北見市教育委員会 生涯学習課 松坂すずの

事業目的	「いつでも・どこでも・気軽に」をテーマに、北見市内で活動する団体・個人が制作した作品を中心に、専用ホームページで作品の写真掲示を行い、市内のみならず全国・世界へ発信を行うことで、北見市の文化活動を紹介するきっかけ作りを行う。		事業が生まれた経緯	令和2年度の新型コロナウイルス感染拡大を受け、3密回避やソーシャルディスタンスなどを考慮した結果、会場を使用していた展示活動を行うことが一時不可能になったため、NPO法人北見文化連盟へ事業委託を行う形で実現した。また、活動自粛による団体・個人の活動停滞を防ぎ、紹介を行うことも併せて考慮した。	
事業概要	きたみ市民芸術祭「美術展」「書道・写真展」「華道展」「ハーブ・アート展等」「姉妹都市交流作品展」に出品された作品のうち、希望するもののみ写真撮影を行い、専用ホームページへ掲載を行う。			上記に係る職員の関わり方/働きかけ NPO法人北見文化連盟へ例年委託を行っている「総合芸術祭」が中止となり、市教委より事業案を持ち込んで、協議を行った。	
取組みの内容	事業内容について（伝えておくべき事項や特記事項を記載）			左記事項における職員の関わり方	当事者や参加者の反応/その後の発展
	令和2年	9月上旬よりNPO法人北見文化連盟と事業契約を結ぶ。市教委を中心に作品とコメントを募集し、芸術祭に関わっていない方にも気軽に参加してもらえるようジャンルの幅を増やした。また、ネット環境を持ち合わせていない方ように図録を作成、市内公共施設に閲覧用として設置した。	☆	参加を希望する団体や個人に対し、可能な限り要望を叶えられるよう努めた。	「新しい生活様式」に考慮した展示を行っていると反響があり、令和3年度以降の事業継続を望む声があがった。
	令和3年～	会場展示が復活したため、きたみ市民芸術祭参加者のみに限定、希望者のみの掲載を行った。	◇	各事業ごとに希望調査を行い、個人情報の管理を徹底。	会場のみならず、オンラインでも引き続き閲覧が可能となったため、新規申込者が徐々に増えていった。
	令和4年	経済の伝書鳩で特集が組まれ、紙面上で作品の一部が公開された。	☆	選ばれた出品者への説明と連絡対応	広範囲で配布されるフリーペーパーのため、参加者からの反響も概ね良好で、事業自体の周知としては良かったと思う。
評価（記入しない）	事業の成果や発展、効果など（記載できる場合のみ）			シート作成時点での担当者の振り返り（反省、改善、関わり方、ターニングポイントなど）	
	<p>☆ 【環境醸成/実際生活に即する】だれでも、いつでも、どこでも関わることができるか（第1条）</p> <p>「コロナ禍」という今まで経験したことのない事態に直面した中で、オンラインを活用した新しい事業に様々な人々を巻き込み、だれでも、いつでも、どこでも芸術・文化に関われる仕組みを築けた。</p>	<p>◇ 【必要な学習の機会の提供/奨励】住民の主体性/ニーズを捉えているか（第2条）</p> <p>若い人や参加者の増加とともに、住民の主体性を引き出すことや、持続させることに繋げることができた。</p>		<p>○ 【コミュニティづくり】新しい関係が生まれたか（第3条）</p> <p>事業を通して、既存事業の存在を知ってもらえた</p>	

<p>事業目的</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 団体規約における目的 (1)美幌町の子どもたちの健やかな成長のために、様々な体験学習の機会を作ります。 (2)子どもたちに関わる諸事業において、活動支援を行い美幌町における子どもの学習機会の充実を図ります。 (3)様々な体験学習を通じて、美幌町の子どもたちが故郷に愛着をもち、誇りとなるよう取り組みを進めます。 (4)美幌町における次世代のボランティアリーダー育成を図ります。 		<p>事業が背景・経緯</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 高校生リーダーを卒業した方から、卒業後も子どもたちを対象とした活動を行いたいとお申し出を受けたこと • 現在存在している青年組織はあるが、活動目的が本人の活動意義と合っていなかったことから、新たな団体を設立し同じような考えを持つ青年層の受け皿として設立した
<p>事業概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 月1～4の定例会 • 町内子ども対象の活動への支援 • 自主事業「お化け屋敷イベント」の運営 			<p>上記に係る職員の関わり方/働きかけ</p> <ul style="list-style-type: none"> • 団体設立に向けての考えたかを共有、整理するとともに、今後の運営方法について協議 • 高校生時代から、活動を重ねていたことからお互いに信頼できていた • 思いを形にしていく部分の支援や楽しさを重視するような運営支援を行った
<p>事業内容について（伝えておくべき事項や特記事項を記載）</p>				<p>左記事項における職員の関わり方</p>
<p>取り組みの内容</p>	<p>令和元年</p> <ul style="list-style-type: none"> • 令和元年5月に第1回の打ち合わせ会議を開催高校生リーダーの関りからお声がけをするともに、代表個人の繋がりから賛同者を募った。当初は5名参加者からスタートした。 • 同年9月に「Fjoy（エフジョイ）」を団体名とし、活動をスタートした。 • Fjoyがスタートしたことを町内団体に知ってもらうことを目的とし、ロゴとTシャツを作成し、町内の子ども向けイベントへ運営協力を行った。 		<p>○</p> <ul style="list-style-type: none"> • 会議という慣れない場/会議をしなくちゃいけないという考えを排除することから行いました。 • プライベートで合う時間を増やすように心掛けました。（焼肉、カラオケ、スノボ、飲み会等）みんな下の年齢なので、結構お金も消えていきました・・・。 • 自発的にやりたいということが会員の中から出たら実現させるということを中心に取り組みました。 	<ul style="list-style-type: none"> • 会員はわけもわからず参加していましたが、集まるのが苦ではない様子でほぼ全ての会員が毎回出席しています。 • 何かの活動についても、積極的に参加している様子が見られました。
	<p>令和2～3年</p> <ul style="list-style-type: none"> • 令和2年より初の自主事業についての企画会議を重ね「お化け屋敷イベント」開催を決定した。 • 令和3年5月に活動資金の調達として、町内の補助金事業へ申請し、プレゼンを経て採択を受け同年8月に第1回目となる「Fjoy本格お化け屋敷～呪われし世界 館の試練～」を開催 会員数が10名を超える 		<p>○ ◇ ☆</p> <ul style="list-style-type: none"> • プレスト、プレゼン等の社会教育で使われる手法をとるところ混ぜながら企画会議を行った。 • また、思い入れを持ってもらえるようコンセプトの部分については相当な時間を費やすよう働きかけました。 • 教育委員会の予算化は考えず、資金調達についても自分たちで行って欲しいという目的補助金の活用について勧めました。 	<ul style="list-style-type: none"> • お化け屋敷イベントの企画が決定してから、青年活動の意欲は一気に高まったように思えます。当日は1週間に1回日付を超える前ぐらまで会議を開催していました。 • 初の自主事業が終了し、実際に自分たちで運営し、アンケートにて参加者からの声を目にして、充実した様子が見られた反面、疲労も感じました。
	<p>令和4年</p> <ul style="list-style-type: none"> • 令和4年に2年目となる「Fjoy本格お化け屋敷～もういいよ。～」を開催 会員数が15名を超える • つなぐプロジェクト2022年寄付団体として「Fjoy」が選出され、寄付金をいただく 			<ul style="list-style-type: none"> • 事業自体の準備～運営について1年目は負担がかかりすぎていたことから、負担を減らす方法について事前に考え、提案を行いました。
	<p>令和5年</p> <ul style="list-style-type: none"> • 令和5年7月に3年目となる「Fjoy本格お化け屋敷～わらべ その学校にはナニカがいる～」を2日間日程として開催 • 会員数が19名を超える 		<p>☆</p> <ul style="list-style-type: none"> • 出来るだけ会員の中だけで事業が運営できるよう動きました。（会議にあえて出席をしない等） • 大きいイベントなので、負担はかかっていますが、次の取り組みへ進むよう働きかけています。 	<ul style="list-style-type: none"> • 職員がいない中での運営に慣れつつあるかなと感じています。 • 新しい人と交流すること、新しい変化に慣れつつあるかなと思います。
	<p>現在</p> <ul style="list-style-type: none"> • 2つ目の自主事業となる「キッズニア」を基盤とした事業を企画中 			<ul style="list-style-type: none"> • 本来の団体目的が叶う事業へのスタートを切っている最中であり、次の世代へと繋げる心を育てるという部分を意識して、伝えていくことを意識しています。
<p>取組後</p>	<p>事業の成果や発展、効果など（記載できる場合のみ）</p> <ul style="list-style-type: none"> • 団体が1つだった時よりも、多くの青年層が地域活動に参加いただけているとともに、意識が芽生えている 		<p>シート作成時点での担当者の振り返り（反省、改善、関わり方、ターニングポイントなど）</p> <ul style="list-style-type: none"> • 小中高の事業にて関わってきたことが、間違っていなかったのかなと何か救われたような気持ちになりました。 • 今後も1事業に満足することなく、先のことは考えず全力で力を注いでもらえるようサポートしたい 	
<p>評価（記入しない）</p>	<p>☆ 【環境醸成/実際生活に即する】 だれでも、いつでも、どこでも関わることができるか （第1条）</p> <ul style="list-style-type: none"> • 年数の経過と共に、仲良しグループになり、途中から加入した人が参加しづらいう傾向にあるが、Fjoyでは新規加入への対応が上手くできている（新人対応の人が会議等でサポートしている） • 青年層だからこそかもしれないが、プライベート時間の活用で輪を広げており、様々な点で団体と関わることが良い • イベント等で他人の協力が必要な場合、仲介する役割を事務局で果たせているのが良い 	<p>◇ 【必要な学習の機会の提供/奨励】 住民の主体性/ニーズを捉えているか （第2条）</p> <ul style="list-style-type: none"> • 担当者が出席しない会議ができるほど、主体的に取り組んでいる • 資金も教委ではなく自分で補助金を取りに行ったりと、行政主導にならず取り組んでいる • 元ジュニアリーダーの思いを受けて、団体の設立をした経緯がある • 主体性を保つ関わりができています（補助金、職員の参加を減らす） • オバケ屋敷イベントの実施も町民から希望を受けている 	<p>○ 【コミュニティづくり】 新しい関係が生まれたか （第3条）</p> <ul style="list-style-type: none"> • 会員の増 • イベント等で協力者がいること、地域の人を巻き込んだイベントが開催出来る • 団体設立→入会につながっている • B-liveとの住み分けができています 	<p>課題/改善</p> <ul style="list-style-type: none"> • 提案させてみて、できる/できないの判別も自分たちでできるようになってくると良い • 職員を通さずとも、自分たちで動くことで、良くも悪くも地域から学ぶことがあると思う。地域のキーパーソンを知り繋がれるようになると更なる発展が望めるはず




事業名： 津別町青年活動プロジェクト and


作成者：津別町教育委員会生涯学習課社会教育係 主任 寺田洋康

事業目的	この会は、津別町内在住又は勤務している青年の集団であり、年代、性別、業種にとらわれることなく、自ら学び、交流し、横のつながりを築きながら様々な活動を行い、本町の地域振興に寄与することを目的とする。		事業が生まれた経緯	津別町では、津別町役場・丸玉産業・津別病院・JAつべつ・金融機関や農業関連などあらゆる場所で青年層が現在働いており、その人数は近年増加傾向にある。しかし本町では、就業後に集まる場所や交流する機会等が何もない状況であり、小さな町なのに互いの顔をあわす機会がないとの意見もいあった。平成17年3月に津別町青年団体協議会が解散となってから約7年が経過し、地元へ戻り家業を継いだ農業青年や就職のために移住してきた青年層が数多くみられ、集まる場づくり・交流の場・学びの場が求められていた。		
事業概要	<ul style="list-style-type: none"> ・月1回程度の定例会 ○定例的な自主企画事業 ・出張サンタ・・・まる太くん（サンタコス）で希望する家庭にクリスマスプレゼントを渡しに行く事業。 ・出張オニ・・・節分にメンバーが鬼に扮して高齢者施設、児童施設等を訪問する事業。 ・異業種交流会・・・町内企業に勤める青年層を一堂に会した交流イベント※近年開催できていない。 ・自主研修事業・・・メンバー自ら立案し、スキルアップを目的とし見聞を広める学習機会。 			<p>上記に係る職員の関わり方/働きかけ</p> <p>設立前に意見を出していた若者への声掛け、予算措置。設立に関しては、町内で既に存在感のあった青年層から声掛け、賛同者10名で団体を立ち上げ。メンバーが主体となり活動できるよう事務作業や事業のサポート。</p>		
取組みの内容	事業内容について（伝えておくべき事項や特記事項を記載）		左記事項における職員の関わり方	当事者や参加者の反応/その後の発展		
	H25	定例会を16回実施。メンバー数推移 設立時10名⇒年度末19名登録		<p>「横のつながりを作りたい」「何かやってみたい」といった気持ちを持った青年たちが集まり、初年度ながらも活発な活動を展開することができ、内部交流や研修のみならず、地域イベントの開催や青年層の交流イベントを成功することができた。不慣れな部分もあり、失敗することもあったが、前向きに捉え、次へつなげていきたいという姿勢がみられた。</p> <p>基本的にメンバーを中心にやりたいことをリストアップしている。事務局は、事業に関する事務手続きなどのソフト面でのサポートを行う。また、他の事業との合同開催について模索し提案を行う。他団体からの協力依頼を受け提案を行う。基本的な立ち位置は、立ち上げ当時から変わりなく現在に至る。</p> <p>全円の反省点でメンバーの入れ替わりもある中、メンバー間の気持ちにムラがあるなど課題もあったが、それ以上にやりたいことをやる意欲が勝っていたように感じる。また初年度並のイベント数で準備など大変だった半面、達成感も大きく成長できた1年だったと感じる。</p> <p>少しずつメンバーが入れ替わるも、定例事業は実施。</p> <p>R3年度で古株メンバーがいなくなり、これまで事業に参加だけしていたようなメンバーのみが取り残され、会議に出席するのは数名に。現リーダーは解散も視野に。町からも唯一の青年団体だからと会議やイベントに使われることも多く、存在意義に疑問視している人が多い。下の世代があまり入ってこないこと、飲み会をやらない世代で交流も停滞気味。</p>		
	リ：上原	内部研修会（コミュニケーション講座開催、青年活動リーダー養成講座参加、登山家栗城史多講演会開催）				
		自主事業（福祉施設訪問、河川清掃・ラフティング、男子会・女子会、交流フェス、出張サンタ・オニ）				
	H26	定例会を16回実施。メンバー数推移 年度初め19名⇒年度末22名登録				
	リ：上原	自主事業を昨年同様に開催。地域住民との関りに積極的に取り組む。（福祉施設訪問、出張サンタ・オニ）				
	H27	定例会を12回実施。メンバー24名に。				
	リ：上原	交流イベントをリニューアル、町内の飲食店に協力していただき「はしご酒」として開催。				
	H28	定例会を14回開催。メンバー16名に。※転出が主な理由。				
	リ：小林	近隣の青年団体との交流を目的に大人の運動会を開催。成人式フォトプロップス製作。				
		高校生ボランティアひまわりと合同で「こどもひろば」を開催。青年期教育の協同。				
		次年度活動内容を各自持ち込みプレゼン大会を開催。内部交流では登山したり交流も多くなってきた年。				
	H29	定例会を13回開催。メンバー20人に。事業は例年通り実施。活動用Tシャツ・パーカーを作った。				
	H30	定例会を12回開催。立ち上げメンバー数名が退会。				
R1	定例会を10回開催。事業が異業種交流会、サンタ、オニが定型。コロナ発生で活動					
R2	定例会を7回開催。コロナでの活動自粛。美幌愛し隊オンライン交流実施。					
R3	定例会を8回実施。提携事業はサンタのみ。立ち上げメンバーが全員退会する。					
R4	定例会を8回実施。活動制限が多くメンバー内の士気が低下。事業も固定メンバー数名のみの参加。解散も視野に。					
評価	事業の成果や発展、効果など（記載できる場合のみ）		シート作成時点での担当者の振り返り（反省、改善、関わり方、ターニングポイントなど）			
	町内の若い世代が町を盛り上げようと地域に出向き、事業が定着し喜ばれることにより本人たちのスキルアップに大きく貢献した。町内においてもandの存在意義をしっかりと示すことができ、最初は若者の合コン集団としか見られていないところから、町の会議等にも呼ばれるまで団体としても成長してきた。様々な交流イベントを開催し、町内の若者の横の輪を繋げることができた。		自分自身担当したのが3年程度で、当初メンバーもいない、コロナで活動できない状態からのスタートで、以前のことはよくわからないが、確実にコロナがきっかけでメンバーの士気が低下した。近年は、リハビリとしてメンバー内の交流を主軸に取り組みしてきているが、参加者の固定化によりなかなか次につながらない現状。新しく入るメンバーも何かやりたいというよりか、誘われたからといった理由で発展していない。			
い（記入しな	 【環境醸成/実際生活に即する】だれでも、いつでも、どこでも関わることができるか （第1条）	 【必要な学習の機会の提供/奨励】住民の主体性/ニーズを捉えているか （第2条）	 【コミュニティづくり】新しい関係が生まれたか （第3条）			
	若い人がいる、男女半々、様々な職種 → 外から入ってくるハードル低い イベントでの声かけ、多業種の青年が集まる 楽しさに気が付く	交流イベント（他町との交流） やりたいことをやる → プレゼン大会	他町との交流、関係づくり 安全に失敗できる環境、雰囲気			

事業名： 若がえり学級

作成者： 訓子府町 桜井朋子

事業目的	高齢社会の中にあって、学級での学習・スポーツ・文化活動を通し自己を高め、仲間との交流を深める中から自分の役割を再発見し、積極的な社会参加を生み出す手がかりとなるよう高齢者の学習等の活動を支援する。		事業が背景・経緯	S47 網走市・留辺薬町に「老人大学」が開設されたことにより開設。 S48 「若がえり学級」に改名 S49 送迎バスの開始 S50 自治会役員体制確。「学級章」決定。移動研修開始。文集「若がえりの泉」第1号発行。 S56 若がえり学級開設10周年記念パーティー開催 S57 公民館開館。活動場所が長寿会館から公民館へ。 H3 若がえり学級開設・自治会創立20周年記念式典・講演・祝賀会開催	
事業概要	月に2回実施。第2火曜日、第4火曜日 クラブ活動、集合学習を基本とする。 クラブ活動：書道、民謡、園芸、陶芸、カラオケ、楽しくストレッチ、図書、歌声の8クラブ 学級生全員がいずれかのクラブに参加し、基本的には2～3つまでのクラブに加入可能 ※通常、クラブは①第2火曜日の午前 ②第2火曜日の午後 ③第4火曜日の午後 集合学習：第4火曜日の午前中に実施。年間計画による。			上記に係る職員の関わり方/働きかけ それぞれの年代の社会教育担当が「学級主事」を担う。「自治会」があることの大切さを発信し続けることが大切。	
取組みの内容	事業内容について（伝えておくべき事項や特記事項を記載）		左記事項における職員の関わり方		当事者や参加者の反応/その後の発展
	4月	開講式・自治会総会・クラブ活動	☆	受講希望があれば、クラブ活動の案内や	長年続く事業のため、新しく入ることに抵抗が
	5月	クラブ活動・集合学習		見学の対応などを行う。	ある方もいる。そこで、各クラブ活動などへの
	6月	クラブ活動・集合学習			橋渡しなどが必要となることもある。
	7月	クラブ活動・集合学習（遠足） ※園芸部はガーデン巡り	◇	集合学習の年間計画は10月までに役員会で話し合った後、4月の総会で承認を得る。	役員は自分が所属するクラブなどの会員など
	8月	クラブ活動・集合学習		内容に対する提案は通年で学級主事が受け付けている。	から意見をもらうなどして、役員会で年間
	9月	クラブ活動・集合学習			計画案の意見を積極的に出す姿が見られる
	10月	クラブ活動・集合学習（学習発表会）			
	11月	クラブ活動・集合学習			
	12月	クラブ活動・集合学習	◇	新しいクラブ活動への相談などがあれば、	時代の流れでさまざまなクラブ活動は生まれては
	1月	クラブ活動・集合学習		会員が集まるまでの間、「サークル」活動	なくなっていった。日ごろから学級生とコミュニ
	2月	クラブ活動・集合学習		として行い、「クラブ活動」へ移行できる	ケーションをとることによって、どのような
	3月	クラブ活動・閉講式・謝恩会		よう支援する。	活動が求められているのか意見を聞き出すことが
	R4	若がえり学級50周年を迎え、菊池町長（初代学級主事）による記念講演や	○	ここ数年では、学級生の高齢化が進み、	「集まる」「おしゃべりする」などの活動が
		記念コンサート（ホラネロコンサート）を実施。3月には記念式典を開催した。		コロナ禍で体力も落ちる中、「クラブ	大切だという理解が進み、活動に参加できなくて
			活動」に悩む学級生も増えた。そのような	もお友だちに会うためのクラブ参加などが	
			中「図書部」が生まれ、さまざまな活動	学級生のなかでも容認されてきている。	
			を行っている。		
事業の成果や発展、効果など（記載できる場合のみ）			シート作成時点での担当者の振り返り（反省、改善、関わり方、ターニングポイントなど）		
開設から50年が経ち、「自治」意識の低下などが一時期問題にもなったが、「学級主事」が「自治」であることの大切さを根気強く伝えながら実施しているため、なんとか自治組織を維持しながらの活動となっている。			最近では「高齢者」と呼ばれる年齢になってもそのことに抵抗を抱く方が増えてきており、そのことで老人クラブの加入率の低下と合わせ、若がえり学級の新規入会者が少なくなっている。体の動くうちからの「仲間づくり」の大切さをPRしたいと考えている。		
評価（記入しない）	 【環境醸成/実際生活に即する】だれでも、いつでも、どこでも関わることができるか（第1条）	 【必要な学習の機会の提供/奨励】住民の主体性/ニーズを捉えているか（第2条）	 【コミュニティづくり】新しい関係が生まれたか（第3条）		
	女性の学級生が多い。男性向けの活動を設けると良い。 名称変更による好印象化ができるが良い。 ☆送迎があるのが良い。 ☆集まることを楽しめているのが良い。 ☆公開講座はだれでも参加可能 ☆高齢で動けなくなってもクラブへの参加がある	◇学級生との対話からニーズを聞き取っている。 ◇自治を大切にしている ◇職員との距離感を大切にしているのが良い ◇学級生に合わせた取り組みの変化 ◇役員を選出も学級生で行うのが良い。	学級の外でもつながりが作れるとよい。 ○複数のクラブに参加できるのが良い ○少ないが新入生がいる ○公開講座による一般参加	・職員が関わりすぎない。 ・自治に任せている部分があるのが良い ・おしゃべりが大事 ・職員間での話し合いも大切	

事業目的	公民館等での食と農に関する取り組みによる健康で豊かな暮らしづくり・地域づくり・まちづくり 背景 農業が基幹産業、豊かな自然、学校給食での実践		事業が背景・経緯	かつて公民館講座から展開した木工芸（現在のオケクラフト）と、生活に根付いた工芸品に合わせた食関連事業を同時並行で事業展開。開発センターには木工室と農畜産物加工室を併設。 H25～食のまちづくり事業は、食育と地産地消の意識醸成、旬の地元野菜を町民に提供できるよう将来的に農産加工品や特産物開発にまでつなげ直販施設を整備、加えて地元農作物を使った地域レストランの開設構想などもあった。森林工芸館や秋岡資料、郷土資料館などとも連携して町外からの人の流れを増やす観光化路線も模索されていた。 栄養士連絡会議を設立し、町内施設の栄養士による情報交換・研修を実施した。
事業概要	・生涯食育の推進 ・地産地消と食の安全・安心 ・地元らしい食文化の創造 ・食の特産品・名物料理づくり			上記に係る職員の関わり方/働きかけ 老若男女問わず様々な方が参加しやすい各種料理講座・公民館サロンなどを展開。食のまちづくり事業への理解を広げるため、周知にも力を入れた。作り手の中からサークルが誕生。地元食材を使った地産地消や、産業化に向けた試行を進めるサークルができ始める。日常の雑談や相談をする中で、付かず離れずサークルのサポート、各機関との情報交換・連携を図ってきた。
取組みの内容	事業内容について（伝えておくべき事項や特記事項を記載）		左記事項における職員の関わり方	当事者や参加者の反応/その後の発展
	H25	栄養士連絡会議（3地区館長との打合せ） 野菜サポーター・栄養士の畑見学・町内野菜取引価格		
	H26～	各種料理講座の実施（親子向け、栄養士が講師、プロ招聘、十美さんカレー、男料理、若者等）	・町内の各組織をつなぐ役割、情報・悩み共有（農家・栄養士・青年・講師・住民・企業等） ・得意を見つける、ふらっと教える＝教わる関係 ・地域おこし協力隊（町外者）や若者の活躍 ・無関心層へのアプローチ、「なんか良いよね」 ・SNSの発信 ・過去を大事に、新たなものの創造 ・工夫して今できることを ※特にコロナ対応 ・気軽に相談やサポートできる雰囲気づくり	◆反応 ・女性の参加が多い ・町民誰でも講師になれる、“得意”の情報集まる ・集まるといろんな話が出てくる ・コロナの影響（参加控える動き、周囲の目） ・産業化の難しさ（サポートの線引き、担当者） ・過去の重圧 ◆発展 ・特産品やメニュー開発は一定の成果
	H27～	先進地視察（加工、ブランド化など）		
	H30～	特産品試作（卵アイス、乾燥野菜）		
	R02～	新型コロナウイルス感染症拡大により、事業中止が相次ぐ		
	R03	アフガニスタンカレーづくり、大人のうどん講座、ミルクランドOKETO		
	R04	特産品「おけばんばくんうどん」発売		
R05	栄養士連絡会議 再開、楽し～な事務所設立（産業化への一歩）			
評価（記入しない）	事業の成果や発展、効果など（記載できる場合のみ）		シート作成時点での担当者の振り返り（反省、改善、関わり方、ターニングポイントなど）	
			産業教育・特産品開発・講座企画・交流など分野が多岐にわたる事業のため、事業目的が不透明。他事業の再開で、手が回らないのが現状。食のまちづくり事業ではない独自の食イベントが行われるなど、町民主体での開催はあった。社会教育としてのアプローチを模索中…	
評価（記入しない）	 【環境醸成/実際生活に即する】だれでも、いつでも、どこでも関わることができるか （第1条）	 【必要な学習の機会の提供/奨励】住民の主体性/ニーズを捉えているか （第2条）	 【コミュニティづくり】新しい関係が生まれたか （第3条）	 人とのかかわりを大切に
	・笑顔で話しかけやすい雰囲気づくりによって関わりやすい。 ・関係者に事前に情報共有をして、事前に話し合いが終わるような状態にすることで、皆が関わりやすい状態になる。 ・日々の雑談の中から、講師のハードルを下げ、町民のだけれどもが講師になりやすい状態にして、講座を展開している。 ・一人では解決できない時は、周りを頼る・力を借りる。	・うどん講座では、楽し～な、若い人が講師となり、うどんづくりの楽しさを伝える→楽し～なや若い人が主体＝住民が主体的に活動している。 ・団体が育っている。町のニーズ、産業のニーズ 酪農家の大変さ、長期的に消費できるしかけづくり ⇒学びの機会提供	・公民館がつながりを生み出す出会いの場。情報を渡すと自然なつながりが生まれ、新しい展開が広がる可能性も。 ・新しい団体の誕生（かまどの会、楽し～な）。公民館を中心とした人と人との出会いづくり。他部署との連携して事業展開。町内の民間を含めた栄養士連絡会議	・多様な講師を呼び出すことで、その人に繋がっている人を呼び込むことができる。結果として多様な人のつながりが広がる。 ・公民館を利用する人たちと会話をして、多くの情報が集まり、必要としている人へ情報提供する。